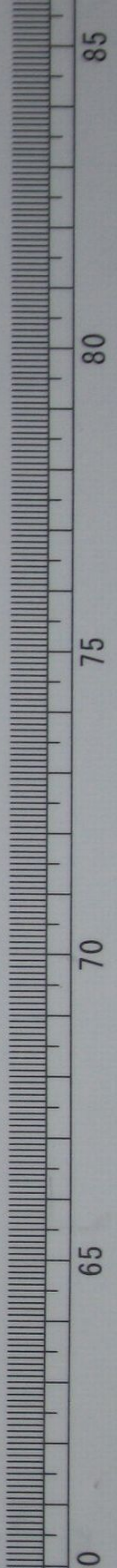


新聞摘要

貳

西垣文庫 特
文庫 10
7313
2



持 文庫10
7313
2



新聞摘要卷之二

刑政 賞度 関

一 奸商を獄ごに繋つなぐ
一 洋銀五十枚の賞格

神かみ 忠ちゆう 孝かう 祗ぎ 関
貞てい 烈れつ 業げふ 関

新聞摘要卷之二



一 仁和寺の宮上書

一 磐城の松魚

文 發明 關

事

一 一草の序

一 題知らぬ和歌

一 祭句七章

一 上野みて詠く人よ遣りたる歌

一 妓院の壁書

一 和歌三首

一 公私雜報會社披露二章

一 題知らぬ和歌

一 全世界續未來記の辨

一 田安家用人の歌

一 詠會津蠟燭之詩

事 關

氏 關

說

論 釋 兵 論

街が

- 一 新聞誌しんぶんへ陳腐ちんぷを忌むいむ
- 一 亞墨利加あもりか寧理度ねいりどの新策しんさく
- 一 旧幕府きゅうまくふの法律ほふりの事こと便べんらび
- 談だん
- 一 臆病おくびやうる者の話わが
- 一 癆瘵らうさいよて死しせ一人ひとの解體かいたい
- 一 盗人ぬそびと却かえる竹鎗たけやりみ死しを
- 一 江戸えどの不景氣ふけいき
- 一 支那しな魏韻林ゑいんりんの書信しゆしん

物もの

- 一 扶桑木かまきの虫むし
- 一 狗友愛猫いぬともねこ
- 一 阿片烟あへん
- 一 浪華なみののそやりうと
- 一 奥州おくしゅうのマンボウ
- 一 徳川氏とくがわうぢの布告ふこく
- 一 同どう
- 一 小間物屋こまものやの溺死なせし
- 價あ

一 四月十一日米錢の相庭
一 古金の定價

技ぎ 巫み 妓き 天てん 淫いん 悖ばい 海かい
藝ぎ 祝しゆ 娼かう 災さい 奔ほん 逆ぎやく 外がい

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同

一 選録上海新報
一 選録烟臺新報
一 香港新聞の譯録
一 上海よりの未狀

通計三十七章

新聞摘要卷之二

△刑賞之部

近江 高田義甫著

奸商を獄に繋ぐ 藤弟四篇

横濱の集會所といふものもと江戸家の頃奸商
 ども奸吏とるまわひ其奸をわしにせん
 ためよこしたる所を此頃旧弊を一洗何らせ
 らる、折柄をまば先此所をぞ去らべ玉ふら
 ん昨日其奸魁たる石炭屋多右工門系屋勤助之
 屋祐次郎等を搦め捕りて裁判所の獄よめられ

けるとぞをべく是ま日本にっぽんの商人しやうじんのけんどう
 のおぼえをいしたる事ことに故ゆゑは商法しやうほうをあらじ
 去いくまは私法しりふほうをたてし仲間なかま或あるにかぶるど
 と稱なづけられたるのせまくるるやうに心をゆち
 うるるを是これに已おのむ計はかりりふく利りを占うんとの奸ねよ
 至おこ起こる事ことふく甚ま公こうみらぬ事ことを幸さいふ 王政御おうせいご
 一新いっしんの時ときふけひくかゝる汚習おごしゆを除のぞき玉たまひるを
 此これおぼえくふの繁榮はんえいの基もとみるべしと西洋せいやうの人ひと
 々ごと喜よろこび何なにへま

藻塩草茅もえんそうぼう八篇はつぺんは日横濱にっぺんのおゆだちとるさいと
 商人しやうじん二十軒にじゅうけんをうし戸とを志しめく家業けがうを休やすめり集あ
 會あ所しよの者もの三人さんにんからめとらきたる故ゆゑは外国がいこく人の
 手てを借かりく裁判所さいばんしよへ訴うぐかの三人さんにんの者ものを早く出い
 させんとのをかまゐとみるべし

洋銀五十枚の賞格 公第一号

西洋五月五日 我四月 即火曜日の朝
 いふ者の庫を破毀し其庫よ至許多の賤宝を奪
 ひ去し者あり若此賊を逮捕し又も知告せる者

新聞摘要卷之二

あらば洋銀五十枚を以て謝せん此段を以て
奉希候

百八番

フルニース

△功業之部 二章

仁和寺の宮上書 内第二十四号

嘉彰仁和寺相續齡十三の秋小過ぎ
ト出家得度尔来一點の法燈を挑ぐといへども
中心全く佛果を歸せば長むゆふ及び少く文字
を勉むといへども空しく光陰を送るの之を志

らば生さぬ 勅旨の違んとする其罪適を難く
慙愧の情日夜止むるに然るに去る九日の拳小
因る頓々還俗を免さる且主人の命を蒙り恐懼
屏營職務に就くと雖も齡僅ら小弱冠を過ご文
力空匱徒々慚愧を益その方今 皇国政權一
小朝廷に歸る所謂千歳一日の期會實に万世不
援の業其所置如何に存ざるに抑 皇国今日
の形勢に至り候事外国人来港の日より起る今
是を挽回するの道は西洋各国の政体事情を志

るみたり中間へ行きて観るものありと雖も在上
の人未だ航行の拳を聞らば下あ紀らうに上通
せざまば凡百の事行しれざるの基る嘉彰自
ら熟慮し曰公聞お背くといひと由一言を体
み去らば机上燈下の識見のえみくハ天下の事
行い盡しけたり故ふ今且く賢徳聰明の公卿お
謀り忽ち一身を抽く万国お航行し外国の情
實を親観し彼の長短を洞察し然後歸都以後四
方歸化の道を開き遂に神州の威武を普く六

合し輝く去めんと欲するを嘉彰忠を
皇国に竭す所以の儀只此事にあり仰ぎ願く
ハ朝廷此素志を諒察し速に允裁を賜えん事
を此旨 奏聞宜く頼入候誠恐誠惶謹言
嘉彰

議定中

磐城の松奠節 内弟三十一号

磐城邊の海濱お松奠多しされど節おし生奠
く漸く其土地の用を足すのえみりしが近年土

佐より職人を得る本節の如く製出を
△文事之部

のし不々さ序 藻弟一篇

曩あヒコサウの新聞誌あまゝかかの人此地を
去し後の久しく其事絶たりし去去年正月我友
人ベリリイ萬国新聞紙を板行せしがこま由弟
十編迄出板しとやぬあめ事浅みだに思へ
らく新聞紙の甚ど有益のものふく今ハ世界中
文明の国ハ此由のみ記国ハあらば然るに日

本より未だ此事さらん行われざる由あるハ
蓋し新聞紙の甚よ益ある事を志るもの少き事
是を編集を海人の之づら学者がりとむづら
し支那文字まそのせらぬ文を用る事と
且ハ出板のめそくまりて時あくれのめづらし
からぬ詩をう記のせる事とによるるべし余
か此度の新聞紙ハ日本国内の時々のとりさた
ハ勿論アメリカフランスイギリス支那の上海
香港より来る新報ハ即日に翻譯しと出さべし

且つ月の内は十度の餘も出板をべしそれゆゑ
 諸色の相場をむしめ世間の奇事珍談あること
 記事紙かきおせるるよしと確實説を探りも
 とめく決しき浮説をのせばみひねがごとく諸
 君の多く此新報を買ひ玉へんと誠○アメリカ
 のワシントンイギリスのロンドンフランスの
 パリス其外諸国の繁華ある地よく新聞紙を
 出板す所甚ど多し日々出板する家あり二
 日毎三日毎も出板すはもとて一年内出板の

数幾億万といふと去るべかりざゆる里近來開
 ひたるハワイおと由五六年前出でハ島人大抵
 文字を去らざりに近日の追々ハ開けく人々
 文明の進之毎朝新聞紙を出板す所と七千枚ハ
 至るといふ支那おても近來香港上海よと漢文
 の新報を板行を大抵毎月二万四千枚を賣り出
 せといへ是ハ皆新聞紙を買ふの人前以て週
 年の價金を板元へ渡し置く出板毎ハ新聞紙館
 よとくハるなり文明の国繁華の地よく如此新

新聞紙のさうんゝ流行を伴事ハ千里の外の奇談
珍説坐るがらふして見聞一門をいでどして諸
方の物價を去り人の知識をまゝ心志をたの
まゝめ又ハ商賣の便利を得るみど其益ある事
甚多さうたぬるに余是故ハ日本よて由新聞紙
の盛ニ流行せん事を願ふ也

九十三番

ウエンリート

和歌 題去らば 藻第三篇 よみ人去らば

むさし野の所々一伐いとみまはるる家のあか
さもおきてわづらふ

発句七章 藻第三篇

あましくよまよと峰の葉を祝さう紫
のまを引籠と續くまはるる
り新り白いもさうかめあはるる
ゆるまを何とたがめんまの危
さ川新よ流りうねるる月あが
橋をいよつうさるる橋のたもと

寛 波 一 寄 鯉 淵
裾 岐 堤 狂 舟 洲

おと来るもぬと人の情をこころに

鹿の子

上野ふく詠て人又遣しける歌

藻弟八篇

けしき

我あいを忍ぶの思のほろろきけおころに終る
みくこあはさるゆや

妓院の壁書 藻十一篇

元是柳管有名士

即今花街遊妓體

名がためをしむ余とあははゆはちぬるあだ
みるあはれりあはし

所乃人いふ此の新吉原松本樓上よくのあは
る里とと

和歌三首 藻十二篇

作良

常陸の国なる人よ詠て遣しける

をみよとちあまかくしどはくむねのさねは
こいしを名がはとりを

ちあらの国へまわりける人よ関山

ころまきる時詠てはるましける

あよ乃のゆいさるりとゆふとあはせははる

てきぬへきすけをそきみ

偶成

松崎川なるえびよせらるるりかかき海
はめていそ海つとせん

公私雜報會社披露二章 公第一号

迷子 欠落 落物 知らい物 盗まれ物 及

び諸賣物等そべく廣く世弘め或い問さ便り
を得と記と下らば少く由遠慮るく其由よりく
の書林又い繪草紙屋へ事柄を委く書を志る

御遣一可被成候速よ出板一々四方へ告志らせ
申べく候

○ 此度我會社よて開板を此新聞を公私雜報と
題を注意ハ朝廷の布告民間の雜説及び時務
時勢の論を普く記載するが故なり夫新聞の出
そく競る益新よ其説いよく出く愈密なり類多
くして始て真偽を分ち確證を得ふ至べし四方
の君子冀くハ新聞を以く速よ本局よ達一廣く

子一ト即磁石の力を以て風船の舵に代用を施
 事むと成二百年の後ハ生さく自ら見とる様よ
 書つらぬとる著述する其原書の楮数ハ凡そ五
 十枚計り所々頃日愛梅主人の訳稿手よ入たる
 故近日其全篇を刊行をべいといふ
 和歌 田安家用人の歌 公弟八号
 後の四月二日下総の中山に慎之居る脱走兵
 の隊長へ君言を傳へんとて行向ひけるに其
 曉またるらぬ事とみるにれを

忠孝

たぐり記すう海かゆい玉に結をきけり
 ぐよそけそあ

詩 詠會津蠟燭

魚名氏

照海彩虹百道長直從東北至西方問誰神功能如
 此元是丹心一寸光

△論說之部

新聞誌ハ陳腐を忌む 藻八篇

新聞誌ハるるこけ実説を求めく出板をべきと

なまさまども遠境の事なるといへば其確否をた
 どさんとそ海内は月日も過行く世間の人も
 皆去りたりんよハ陳腐の昔語りとなまらつま
 らばさまばたと一少ハ実事に違ひたりとも
 いづくよくわゝる事の侍りしごころんまを
 があつたと湯屋髪結所のもろも其人の口ろ
 ら出く此人々の耳に入るハやがてそれが新聞
 みぞらまなるいりよとみれを則そあよそその
 事あまばるり

亞墨利加 寧理度の新策 第十一篇

當今日本の急務ハ内乱を治むるより先ら
 ざれむ干戈日々尋ぞく止時なく此よをハ
 バ彼所よむとま至國勢窮蹙四民困弊終よ万国
 一對し國躰を失ふよ至るべきなり国内其民を
 統轄するの主なく人かのか其私を討り国事日
 に多端よく実ハ危急存亡の秋といふべし此時
 小方々君子たるもの天下の為よ治安の策を建
 ざるべからば時いまぞ至らばと稱し唯一身の

為^よすく^く天下の事^{こと}戦^{いくさ}うへ^へ至^{いた}る者^{もの}は攻^せられ
 んとを恐^{おそ}る^る黙^{もく}止^とをべ^らんや夫^{つま}国^{くに}の必^{かな}ず一^{いつ}
 政府^{せいふ}有りて其^{その}威^い力^{りき}内^{うち}に以^{もつ}て国民^{こくみん}を服^{くわ}するに足^{たり}
 る外^{ほか}に以^{もつ}て萬^{まん}國^{こく}の侮^{おご}りを禦^{おご}ぐべ^きさ^みり此^{こゝ}の如^{ごと}
 くせんよ^よの国内^{こく}内^{うち}万^{ばん}民^{みん}拳^{こぶし}く^く一^{いつ}政府^{せいふ}を奉^{ほう}戴^{たい}せ^{ざる}
 べ^らう^らら^ら政府^{せいふ}亦^{また}国民^{こくみん}を視^みると子^この如^{ごと}くをべ^ら
 則^{すなは}ちよく永^{えい}久^{きゅう}治^ち安^{あん}する^る得^え日本^{にっぽん}中^{ちゆう}二^に百^{ひゃく}八^{はち}十^{じゅう}二^に
 の大^{おほ}名^な各^{おの}其^{その}私^しを營^{えい}む^るおと^と何^{なに}とを^をおご^るを恐^{おそ}る^る
 互^{たが}に相^あ忌^いみ^む且^{かつ}政府^{せいふ}の奸^{けん}譎^ご暴^{ぼう}逆^{ぎやく}を為^なす者^{もの}を制^{せい}御^{ぎよ}

を治^ちする^る足^{たり}る^ると城^{しろ}欲^ほせ^{ざる}の^の大^{おほ}ま^ま何^{なに}や^や生^なて^り永^{えい}
 世^よ治^ち安^{あん}を欲^ほむ^る其^{その}領^{りやう}地^ち兵^{へい}卒^{そく}銃^{じゆう}砲^{ぱう}城^{じやう}廓^{くわく}軍^{ぐん}用^{よう}金^{きん}穀^{こく}軍^{ぐん}
 艦^{かん}等^{とう}一^{いつ}切^{せつ}兵^{へい}事^じに^に関^{かん}涉^{せつ}を^をは^はす^る由^{よし}の^の威^いを^を集^{あつ}めて^て之^を
 政府^{せいふ}の^の手^てに^に委^い託^{たく}し^て全^{ぜん}國^{こく}の^の用^{よう}を^を供^{きゆう}じ^て日^{にっ}を^を期^きして^て新^{しん}
 政^{せい}を^を行^{こう}ふ^べし^て而^{しか}く^く一^{いつ}社^{しゃ}連^{れん}名^{めい}の^の證^{てい}書^{しょ}を^を大^{だい}名^{めい}よ^よ
 あ^あた^あへ^へ其^{その}納^なる^る所^{ところ}の^の品^{ひん}相^{さう}應^{おう}す^る政府^{せいふ}の^の金^{きん}藏^{ざう}よ^よを^を償^{たが}
 ひ^ひ與^よふ^べし^て又^{また}政府^{せいふ}當^{たう}務^むの^の役^{やく}々^々の^の廣^{ひろ}く^く諸^{しよ}藩^{はん}よ^よを^を
 採^{さい}用^{よう}す^る政府^{せいふ}の^の唯^{ただ}外^{がい}國^{こく}へ^へ對^{たい}し^て日^{にっ}本^{ぽん}國^{こく}旗^きの^の威^い徳^{とく}を^を
 示^しし^て貨^か幣^{へい}と^と海^{かい}陸^{りく}軍^{ぐん}の^の武^ぶ力^{りき}を^を備^びへ^るの^の所^{ところ}と^とる^るを^を此^{こゝ}

の如く會社を建立し約束を嚴より各を以て得
 る所所らしめば大名一由政府の背者なく国内
 ながく安静ならん何者大名其約束したる所の
 者を得んがとめ政府の利とそべり是は
 りる日本内乱を治るの道此を棄て他なるべ
 し万民早く此道よよ各其分をまもらば日本
 の威徳開化隆盛世界に輝くと愈速らんとは
 然るか内乱をさまたげて益分裂せむ數百年
 来の弊習を一洗せよと豈容易ならんや日本

人地図を見く其国の極小なる誠志るべし大日
 本の稱を以て人を欺くこと何と況や内乱
 何るか至るに外国の人心竊之を笑ふのこ
 日本国のいつまでも日本人の手お何らんと誠
 欲せむ早く内乱を治め衰弊の風を外国より示
 し之を以て進歩の情を逞しくせしむるべしと
 くれ

一千八百六十八年五月

漢国

膏理度謹具

旧幕府の法律の事お便みらば
 此度王政復古ニ付旧弊を一洗せらるるの
 趣を聞えられ候とれども各國の士商ともお目を
 括ひ足をとをたてし新令のいづる候待奉る也
 定めり旧来の汚習を掃清し文明なる法律を下
 し玉ふべし旧政府の法律の拘束おなくして不
 便利なる事のご好んご何事によらばたや
 く整ふとる紀をよとす候の風お是れ依り
 奸吏時を得るにたりよ暴威を振ひ種々の惡討

を設て商賈をおまらせ以て自ら富の謀をみせ
 此等の事最おくむべたの至りなま早く此弊
 を一洗し公明正大なる古の王政お復し玉ふ
 万事簡便し差支なく貿易の出入日々盛
 んみららば万国の士商おらそひ来りて歲月を
 へざるに富強の国とみらん事立して待下
 戸部の裁判所よ目安箱を出し農商共よ民間
 の疾苦を速訴へるをゆるし玉ふよこれお
 てもその簡便なる法を貴び玉ふと候あるべし

△街談之部

臆病る者の話 内弟二十四号

中仙道桶川宿の先よくの事なりしと云 此頃ハ
 街道筋左右の田圃は青麥繁りて生長せしむる
 日一隊の軍勢いろめく装ひく此所を通行せ
 る小農夫の馬五六疋打續き荷をたせし未
 だかゝりし軍隊の先へ駈け越んと思ひ畑中の
 うら路を一さんよ走りし折しも盗賊の防ぎな
 りとて農民どもが誓吉せし小銃の音聞へたる

彼の軍勢伏兵あると思ひたる隊長真先よ
 走り出し跡をも見ぞと逃げ去りしが固より敵
 の所らさきバ退々か立戻り棄て置し荷物等取
 まとめ何きへう行しと其邊の村童までも笑ひ
 一実ハ臆病の士の今の世よ何ぞたりと有る
 人の語られしとさきと臆病も習しよみて勇士よ
 るみるものに見ゆ漢土三国の頃柏孝長といふ
 者あり城中に居りしが俄ら敵の攻奇る声
 をきくや否や恐まぬのゝに急よ一室よ駈延こ

戸鎖をみる一頭よ里夜具打被りく伏居る里合戦
 半日をうりよて稍くよ面を出せり其明日ふ
 起き出く立ざ、あたり其次の日ハ戸口を出く
 戦ハの消息を聞たり四五日お至りく後自身に
 楯を負く花々敷闘ひくと九州春秋よ見えたる
 されハ臆病なりとて一生弱きよ由所ら収む必
 ば鼻腫者と侮るべうらば
 癆瘵よて死せし人の解體 藻弟五篇
 此項よは鑿館よて癆瘵よて死ん人をもふこけ志

たり肺の臟よ三つめでたもの所里一つハぐり
 ぐりのやうあてまごそこくかとく一つハぐり
 よみりくぬるく一つハそでよくさきて所るよ
 む里たり
 盗人却く竹鎗よ死を 藻弟九篇
 高力主計頭といふ人江戸の乱を避く其妻を上
 野の国なる知行所へ逃りハくはか此頃夏よ
 む里たれを夏の着物を妻の方へ送るとて葛籠
 お入て牛込の所がをより船よのせき出くたる

に武士二人入来りく船中の荷物をらむひ取り
て去りける市中の者集りて竹鎗にて其盗人
二人を誅さ殺し去り

江戸の不景氣 藻弟十四篇

江戸の甚ふきいさよありて何の所記もひよ
らびいまなま猿若町の芝居の三座を一狂言づ
ゑくまたる事多あり故俳優が不遇困る
と云えく中よ下のやくやくのよせへぶ由宮
芝居へでも出くもかまぬと定まるとぞ由

この此三坐の俳優のよせ宮芝居へ出れば位が
下るにゆゑて其仲間ををづる事ありしが御一
新の折柄なれば是ゆかゝる事あるるべし

支那魏韻林の書信 藻弟十四篇

支那の吳淞といふ江の邊りふ滬といふ所あり
そこを魏韻林といふ人ありけるが五月七日其
人よ望日本の岸国華といふ人の由と一書信を
送り其らち云此項上海港にて日本長州の
徳山氏ある人ありしが英戈博識の高士あり

其人泰西の学志し何ぞ近き内は輪船も搭
 て英國に去て師を撰んば其れといへり又豫州
 宇和島の人にも来れり是亦勇壯豪邁の士に火
 輪船一艘を買ひさきり其價洋銀十萬元と云り
 今又日本人數十人何ぞ日々上海城邊を遊玩
 せり現に黄埔の某氏に寓在せりと聞く曾く日
 本にありし時ある賊軍と戦ひし輪船の汽氣機
 械を損せし故に今去て修理せんか為に来れ
 りとぞ觀林名に船別号に白鶴山人といへり高

名なる画人より梅と美人とに最その妙を得た
 其胡公壽張子祥孫仁圃張斯桂李治梅などあり
 ありあり

扶桑木の虫 藻第十四篇

此世界の東の末ては扶桑木とて最大なる木何
 ぞ七八百年以来此木は虫が湧きいたく喰ひら
 しく殆ど枯るとい始めりつくりたる赤色の
 虫四ツ五ツあてに起る近き何とりの枝葉を喰
 居しが又白き虫ニツ三ツ出来て赤虫と云合

終^{つひ}に赤^{あか}き虫^{むし}をくひ殺^{ころ}し東^{ひがし}にさして出^いて大^{おほ}枝^{えだ}ふとまてく葉^はどゆくみりちふ赤^{あか}虫^{むし}の種^{こゝろ}も何^{なに}ちあちよ残り^{のこ}り居^ゐらんまは由^{よし}あそとと這^はまのまてくひ又^{また}の白^{しろ}き虫^{むし}とかえ何^{なに}ひみどくまてか^かくく年^{とし}ふるなどお黒^{くろ}虫^{むし}青^{あお}虫^{むし}黄^き虫^{むし}みどさまぐの虫^{むし}いふきて夜^よ昼^{ひる}とみるゆりくとくひ何^{なに}らしかこ何^{なに}ひみどくして騒^{さわ}ぎ立^たねどに此^{こゝ}木の主^{ぬし}たる者^{もの}も其^{その}勢^{いきほひ}ふおされくせいを治^{おさ}め何^{なに}とハげ此^{こゝ}木^きをばくいとられんとは口^{くち}惜^{おし}きと思^{おも}へどせんを

べみしさる程^{ほど}は虫^{むし}の何^{なに}またの子^こを産^うつけ又^{また}外^{そと}よまくるもあり何^{なに}らしとよまくもありてちいさをや大^{おほ}きなるや色^{いろ}々のさねみげなる虫^{むし}うざくこむれぬくくみ程^{ほど}よいと大^{おほ}きなる木^きみ色^{いろ}ど虫^{むし}み何^{なに}所^{ところ}も何^{なに}らざま何^{なに}此^{こゝ}木の主^{ぬし}いりて此^{こゝ}虫^{むし}共^{ども}追^お拂^はいてんとて立^た騒^{さわ}ぎしりど由^{よし}力^{ちから}及^{およ}びを以^{もつ}てや之^{これ}ぬ夫^{おつ}よりぞ虫^{むし}の尚^{なほ}ふえよけるかくく年^{とし}経^へく後^{のち}何^{なに}ちこちよ大^{おほ}きなる虫^{むし}いでさく小^こ虫^{むし}共^{ども}をくひあろしぬ又^{また}それより由^{よし}大^{おほ}きなるがひとつ

いできく其虫共と争ひ何れ程よ又大きなる虫
 出来りてをむらふ虫どもを皆くひころしぬ
 この虫の外の木ノ葉までくひ何れしとて此大
 虫死々る何とみ今一つの虫何りけるがやうく
 くひふとりてこれぞ此扶桑木をがおのが物顔
 ふくく木の主よの少しをり望の枝を興へ置く
 おのが因ある小虫家来虫共数志らばおのりる
 虫どもみ枝共それくよじり興へておのれに
 東よさしひくころのいと大なる枝よ巢く住りる

さて其虫共子何れまとうえつゝけなる程よ年々
 おもひありて此木おを泥間ゆるくたり居く
 夜昼と多く唯くひよくひ何れしとれをさしゆ
 大なる木もまど芽のいづるひまゆもく今のを
 や枯るんとに
 狗友愛猫 公第四号
 或る諸候の家来よ生類を好む人何れ鳥類猫狗
 何くまると多く畜ひおけり狗の猫を見ればうる
 らばかき殺すものなれども同ト家よやゝなる

る、故^{もと}にや常^{じょう}に相^あた^あすむ^む睦^{むく}しく暮^くした^たる
何^{なに}る日^ひこの猫^{ねこ}外^{がわ}の狗^{いぬ}あま^まとふ^ふおひ^ひせ^せま^まられ^れの
かま^かが^まとく^とな^なま^まし^し時^{とき}此^こ狗^{いぬ}遙^{とほ}く^くこれ^こを^を見^みて^て飛^とが
如^{ごと}く^く走^しり^り来^きま^ま猫^{ねこ}を^をお^おの^のり^り腹^{はら}の^の下^{した}よ^よか^かこ^この^の眼^{まなこ}
を^をい^いら^らし^し尾^{おしり}と^とま^まに^にお^おげ^げ他^たの^の狗^{いぬ}を^を寄^よ付^せせ^せ其^{その}内^{うち}
主^{しゅ}人^{にん}来^きる^る他^たの^の狗^{いぬ}を^をお^おひ^ひ退^ひけ^け狗^{いぬ}を^をお^おの^の猫^{ねこ}を^をい^いご
さ^さく^く飯^いり^りと^とぞ^ぞ物^{もの}好^あま^まる^るもの^{もの}も^も何^{なに}る^る者^{もの}也^{なり}

阿片烟 藻弟一篇

阿片烟の禁^{きん}のかね^{かね}る^る外国^{がいこく}との條^{じょう}約^{やく}よ^よ乗^のせ^せら^らる^る

たれ^たれ^れども^{ども}今^{いま}度^ど又^{また}嚴^{げん}重^{じゆう}の^の令^{れい}を^を下^{くだ}し^し玉^{たま}ひ^ひし^しの^の我^{われ}等^ら
の^の最^{さい}も^も敬^{けい}服^{ふく}を^をは^はま^ま堪^たへ^へさ^さる^る所^{ところ}に^に阿^あ片^{ぺん}の^の惡^{やく}き^き
物^{もの}と^とい^いふ^ふり^りみ^みか^から^ら日^{にっ}本^{ぽん}お^おて^てハ^ハ斯^し嚴^{げん}禁^{きん}よ^よる^る不^ふ
こ^この^の惡^{やく}き^き所^{ところ}を^を能^{よく}志^しす^すた^たる^るもの^{もの}甚^{しん}少^{せう}ハ^ハ此^こ故^{ゆゑ}も^も今^{いま}
こ^こハ^ハ其^{その}大^{だい}略^{りやく}を^を記^しす^すべ^べク^ク阿^あ片^{ぺん}ハ^ハ天^{てん}竺^{ぢく}の^の産^{さん}を^をは^は
物^{もの}よ^よク^クイ^いギ^ぎリ^りス^ス人^{にん}是^{こゝ}を^を買^かひ^ひ未^まり^りク^ク支^し那^なの^の諸^{しよ}蕃^{ばん}
へ^へ賣^うり^り捌^さくと^と毎^{まい}年^{ねん}二^に万^{まん}五^ご千^{せん}箱^{しょう}位^い一^{いち}箱^{しょう}よ^よ付^つ代^{だい}洋^{やう}
銀^{ぎん}五^ご百^{ひゃく}枚^{まい}左^さ右^う多^たり^り此^こ物^{もの}大^{だい}毒^{どく}物^{ぶつ}よ^よク^クこ^これ^れを^を吸^すへ^へ
バ^バ次^じ弟^{てい}く^くの^の精^{せい}神^{しん}を^をと^とる^るひ^ひ色^{いろ}巧^{たく}を^をさ^さめ^め力^{ちから}か^かと

ろへつひに何事を由すはを所とをばさきとも
 一度此物を吸ひもつむまばるるをよきやめる
 事ならば若やめる時の必速く其毒は阿たり
 て死をとるとぞ夫故いりるる旅も携へ行く
 吸ふるに此物甚高直るまば元相應の身代の人
 亦て由段々真乏に至りからどの病人の如くも
 て十分のをたらき叶のせされ共一日由阿片を
 吸ひどよの居られど家財衣服を賣り尽し後
 ハ娘をうりて田地も家も賣りて一片の烟とるを

もの支那人ふのいくらるる知られぬやど
 り人をそくふと成と記玉いし釈迦如来の本
 よ里人を害し国を滅すべき大毒物を生し出
 事誠おちやしむべきを或友人阿片烟の支那
 へ入津せし高を記したる帳面を志らべし嘉
 慶元年より同治七年までの間一億二十七万
 五千箱あり時々直段の高下はわれど由此代洋
 銀幾億万枚あるべし支那国あかする大金を
 出し是を買ふといへ共其物のたちまち烟と

るりく残るるとるし其上人命を害し子孫を絶
至るるりされれば始めの如く支那国にて由此
事を防ぎとめんとして種々心を勞し嚴禁を立る
せしうと由一度廣まりし後いつひもやむと
みし迄来るとりて此禁を記の之みらば高位
の人々も又是を愛そとりや

浪華のそやり唄 藻第三篇

時が来たまはばおさつがくさるそふくかをばも
かびがさび

奥州のマンボウ 内三十一号

奥州海は「マンボウ」と云へる奥州に磐城領最由
多し即ち鯨の別種を多く水上よりかび睡る
を以て又是を「ウキ」と云ふ其腸胃頗る下利を
治る領主より毎歳幕府に貢獻あり世に是を知
る者懇望し其妙を感じ當時一般貢賦廢止せ
らるよと如此の効能物多く鄙地に埋まら
遺憾と云べし

徳川氏の布告 内四十三号

上様御實名家達様と奉称候旨御旗本御家人中
江可被達候事

同日号

溶姫君様御事加別表ニ於テ御所方の處御養生
不被為叶去る三日御逝去被遊候此段御旗本御
家人中江可被達候事

小間物屋の溺死 内弟四十九号

五月十五日戦争騒ぎよて上野山下邊小間物屋
のあるトるよ一王子邊へ逃ましが数日あり

ついでの大雷雨よて飛鳥山下の川水漲ざり溢
ゆき、の者路由りぬ討りありしが憐むべし
彼の町人遂に出水のため溺死せし土人由
是を見え援けざり程へく之を引あげ見るに
金子千兩を風呂敷よつゝ脊負たりと実子
金の貴きよかり折あハ塵芥おもひとく身
命を救ひがと記りめと思はる

△物價之部 二章
四月十一日 辰 米錢相場 内弟三号

美濃米 三十五石二付 金百二十四兩二分仕切

町方ニ賣下ハ

中白 金一兩二付 二斗四升あり

文久錢 金一兩二付 十三メ九百三十三文

百文錢 十メ八百文あり

古金の定價 内三十二号

慶長 小判 九百〇五兩一分二朱

元禄 小判 六百八十五兩〇三朱

武藏 小判 四百七十二兩二分

享保 小判 九百三十兩一分二朱

古文字 小判 五百二十兩二分二朱

真文 二分 四百〇六兩

文政 小判 四百〇六兩

一朱金 二百二十七兩一分二朱

草字 二分 四百〇四兩二分

古二朱金 二百六十兩〇三朱

五兩判 三百四十二兩一分二朱

保字 小判 三百九十六兩一分

正字	小判	三百十七兩一分
安政	二分	百六十一兩〇一朱
享保	大判	七十八兩一分
慶長	大判	七十八兩一分
元祿	大判	六十一兩一分三朱
新	大判	二十六兩二分二朱
寛永鑄錢		二十四文
寛永銅錢		十二文
文久銅錢		十六文

天保當百

是までの通り

右之通り

太政官より御解出し相成候事

△海外之部

選録上海新報 藻第六篇

蕪州の奉行曾中堂といふ人上海に來りて西洋
 人と議して錢路を造りて蒸氣車にて蕪州と上
 海の間荷物の運送人の往來を便利せんと企
 てたり此事の成不成ハ未可知といへども蒸氣
 車の有益なる事甚大なりされど支那の極め

頑固なる国に小民共さまぐの異論を起し
 ごとく疑惑を抱きて是を作ると誠喜をさゆべ
 英國より初め蒸氣車を工夫しいたる
 時西の海邊より東の港まで真直に鐵路を造ら
 んとせし其間一ツの大城あり其城主是
 をゆるさば是に依りてやむと誠得て三十
 里のまはり道をして作りさて鐵路成就せし
 後とづりに一年餘おして城主も民も其便利よ
 くて大益ある事をうらやみ甚後悔せりよる

鐵路を造る者をよびよせし彼鐵路をまつて
 お造りるを此城下をつらぬきて海岸に達
 せよといふれども其鐵路師も亦これをゆる
 さかりしとぞ是に今より四十餘年前のとよて
 英國に已に文明なる風俗とあり頃なれども
 猶くくの如く偏固なる城主ありし
 選録烟臺新報 同篇
 支那国北邊の捻匪といふ賊徒八万人あり紅衣
 紅巾あり眉を赤く染たり四月五日其前軍皆

騎馬隊より天津城の十四里外までありよせり
 りの支那国王大さ小驚き官兵を發し是を伐
 んと用意せり天津に居る英人も兵船をそるへ
 る敵を防ぐの支度をたたり六日九つ過頃俄に
 郷民ども群をなして東南の方へ逃走りたまは
 何事あるぞと問ふ賊軍已に奇来れりとして左せ
 さるれば内外士商共甚驚慌せり老幼家賊を
 船よのせと紫竹林といふ所の邊へ立退人多し
 北京より李鴻章左宗棠といふ二人の大將を命

けて大兵をいさめ天津の四方を警衛せり此
 時の風説も今来る所の賊軍のたゞ先手の勢を
 かりぬく後軍の猶いまだ到らばといへり何る
 英人馬のりて賊軍のそるへたる所近く往く
 見しお五六百人紅衣紅巾にて馬に乗り手お小
 銃を持し訓練をみしおたりしとぞ夜おなりて
 天津の南を見渡せば火光天を焦るが如し是に
 依り城の内外とも殊更嚴重に警衛せりかく
 て八日朝に至りて賊軍のづくともみく逃さり

一と聞く李鴻章左宗棠と美国領事官法国領事
 官ととめ満州の歩兵をひきおろす南方の村里
 お出く百姓共お問ひしに拾匪共十人二十人
 て何ちあちの民家に入込て刀をふるひ又ハ小
 銃をもちて人をおどし金銀を奪ひ取り昨夜
 村落お火をけりけりせたりと答へし或人の曰拾
 匪此時天津をさるる三十里の所を屯集せる人
 数万餘人婦女もまゝ馬に騎り刀をおひ
 たりとぞ

香港新聞の譯録 藤弟七篇

四月廿七日 廣東省城の揚某といふ所の監商人
 るり多海が順德縣の龍潭渡といふ所を船にて
 通りけるが忽然として大風吹起り大雨そそぐ
 がおとくゆりまきば船人とも大いにおこす
 さいて船をこぼれとされとも巨浪をう
 の如くおろかみ及ばざりしおろる外の船お打
 ちたりと二艘ともお覆没したりあはれむべし
 搭客四十餘人大抵皆溺斃せし此揚某なるも

のハからうトて命むりりむをたむち得く省城
歸り来りくかくもの語りたりとぞさて其
水濱にあまし人家樹木等悉く風雨は打碎れ
とぞ或人の説よハ此時断尾龍が経過し故
うる異常の風勢有りしむらんと

支那人のとりく龍どの鬼たのといふ怪談を
あのみるり是ハ其国の学风よろしうらぬ故
道理みくらたうらめとるるべし
上海よりの来状 内弟十五号

一 支那より西藏国を通りぬけ崑崙山をとえト

ルコ魯西亞の間道をはらく

一 暹羅国の法朗西の為よとられたり

一 支那国内當時平穩にして歐羅巴諸国と条約

を改定し貿易さかんよ始れり

一 天津より韃靼蒙古の地方へ鉄道を作り火輪

車を以て西北諸国の物産を運輸せんとし

一 支那王政あましく西洋各国の法を学び英吉

利の大学師韋先生を以て太子太保としとゆ

